

---

# 恋人たちの午後

極楽天

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋人たちの午後

### 【Nコード】

N4461B

### 【作者名】

極楽天

### 【あらすじ】

けだるく甘い恋人たちの午後。彼の言葉で少しずつそれが崩れていく。

「里美、蛇って好きか？」

突然の疑問符だった。里美はボタンを留める手を休め、新一の方を見た。新一は落ちかけた灰をけだるそうに見ていた。

「蛇？　なんで急に？」

一番上のボタンを留め終えた所で里美は、テーブルにあった灰皿を新一の前に差し出した。

「好きか？」

新一は、灰皿に仕事を終えた煙草を置いた。紫の煙は天井まで昇ってゆく。里美は髪を梳かしながら、その手を休めずに答えた。

「別に。あまり好きってことも無いけど、大嫌いつてわけでもないよ。あんまり触りたいとは思わないけどね。」

ブラシをテーブルの上に置き、里美は新一の隣に座った。ベッドがゆっくりと沈んだ。

「そうか。」

窓からの黄金色の夕陽が部屋にたちこめる。最近は何分の日が長くなってきた。夏がすぐそこまで来ているのだろう。

「なんでそんな事聞くの？」

好奇心に溢れた里美の瞳が新一の憂鬱そうな顔を捉える。新一は目を瞑ったまま返事をしない。

「ねえ、なんで？」

新一は普段から口数の少ない男だった。黙っていても絵になるくらいに容姿で、その目には、何か悲しみのようなものがあった。

そのミステリアスな部分に惹かれてか、常に新一の隣には女がいた。女たちは新一に言葉を求めなかった。彼女らが求めるのは、自分の隣にいて見栄えのする男だ。要は見た目さえよければいい。言葉は不要だ。

「昔、……」

新一はベッドから下り、黄金色の源流の側に立った。

「俺は家の庭に入ってきた蛇を殺したんだ。確か小五の時だったかな。」

里美はベッドの上で膝を抱えて座り、新一の話に耳を傾けた。彼女はこれまで新一から話らしい話を聞いたことが無かった。必要最小限の会話、それが彼女にとって彼の言葉の全てだった。

「蛇って神聖な力を持つてるとか、殺すとたたりがあるとかってよく言うよね。」

黄金色の源流も枯れ果て、外はもう薄暗くなっていた。里美の言葉にリアクションを示さずに新一は言葉を続けた。

「夏の暑い日だった。俺は縁側でスイカを食ってた。そしたら茂みの中から、白い蛇がすつと出てきたんだ。」

里美は壁に上半身を預けていた。目は窓の外を向いている。

「白い蛇？ 珍しいね。」

大きな溜め息を吐き、新一は椅子に腰掛けた。

「確かに。俺もその時初めて見たよ。驚いた俺はそいつから目が離せなかった。すると、ふとそいつと目が合ったんだ。」

里美はクスツと笑った。

「目が合った？ 気のせいじゃないの。」

真剣な表情のまま、新一はゆっくりと首を振った。

「気のせいなんかじゃない。確かに合ったんだ。そして突然、やらなきゃやられるという考えが頭に浮かんだんだ。」

口を閉じたまま里美は新一の話聞いた。新一は彼女にそうならざるをえないような話し方をしていた。

「俺は、婆さんが使ってた草刈用の鎌を手にとった。やつはずっとこつちを見続けていた。恐かった。俺はいつのまにか冷や汗をかいていた。」

そこで新一は、ゆっくりと息を吐いた。話に夢中になっていた里美は、彼に話の続きを促した。

「それでどうなったの？」

新一は里美の方に体の向きを変えた。

「最初に言つたる？ 俺はやつを殺したよ。手に持った鎌でばっさりとな。赤い血が手や服に飛び散った。そして俺は泣いてたよ。大声あげてね。」

もう外は随分と暗くなっていた。家々にも灯りがともされ始めていた。

「ふうん。大変だったね。」

感心したような声で里美は言った。里美はベッドから下りて帰る支度を始めた。

「話はここからなんだよ。」

沈んだ声で新一は言った。

「えっ？」

里美は手を止め新一を見た。彼の顔に微かに笑みが浮かんでいるように見えた。

「二年くらい前かな。やつが頻繁に夢に出てくるようになったのは。」

「やつって……。白蛇のこと？」

オドオドした様子で里美は尋ねた。新一は椅子に深く腰掛けたまま、全くとっていいほど動かなかつた。

「ああ、そうさ。そしてある晩やつは俺に言ったんだ。『私はお前の中にいるぞ』ってね。」

里美は言葉を失っていた。とても冗談を言っているとは思えなかった。その言葉の一つ一つが、ゆっくりと里美の頭の中に入っていた。

「当然こんなこと信じられないだろうな。だけどさ、俺にはしつかりと感ることが出来るんだよ。頭の中でやつが這いずり回っているのをな。」

全身の血の気がすつとひいた。里美の顔は真っ白になっていて、手は小刻みに震えていた。そして、新一の方をこれまでにしたことの無いような眼差しで見つめた。

狂っている。

この男は頭がおかしい。里美はそう思った。

「そして、やつは俺に言うんだよ。若い女の血が欲しいってね。」

里美は失神寸前だった。心臓が胸の中で暴れまわり、他の内臓を押しつぶすんじゃないかと思った。

そして、近くにあったハンドバックを引ったくり、急いで部屋を出ようとした。

「おい。何処に行くんだよ。」

新一の生気を失った声が里美を追いかける。全身がわなわなと震えている。嫌な汗がとめどなく体を這って行く。

玄関で靴を履きながら里美は言った。

「ちっ、ちよつと、急用思い出しちゃって。早く帰んなきゃないの。だっ、だから。」

新一の瞳はしっかりと里美を見据えていた。

「また明日も来るんだろ？」

透き通るような優しい声だった。里美の呼吸はどんどん早まっていった。目は大きく見開かれたままだった。

「うっ、うん。じゃ、またね。」

ドアは一瞬で開き、一瞬で閉まった。

里美は泣くのを必死にこらえながら街の喧騒の中を走っていった。夜の街は今まさに活動を始めようとしていた。

「蛇が頭の中を這い回るか。」

新一は思わず笑った。

「くっ。我ながらよく考えたもんだぜ。」

押さえ切れない笑いととも新一はベッドに横になった。

「やっぱり、別れたい女がいる時はこの話に限るぜ。」

この話を新一が女に話したのは今日で七回目だった。いずれの場合も女たちはその後戻ってこなかった。これが彼の別れの方法なのだ。彼の容姿が功を奏して、この計画は失敗したことがなかった。

「また新しい女でも作るかな。」  
ベッドの上で大の字になりながら、彼は一人呟いた。

自分の頭にある大きなミミズ腫れのようなものが、ゆっくりと動いていることに、彼はまだ気付いていない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4461b/>

---

恋人たちの午後

2010年10月8日15時36分発行